

# 大学生における愛着スタイルと母親に対する感謝との関連

中山 航\*・小嶋 秀幹\*\*

## 要旨

大学生236名を対象にして、愛着スタイルと母親に対する感謝の関連を検討した。独立変数を愛着不安と愛着回避、従属変数を母親に対する感謝を尋ねる質問の5つの下位尺度(「うれしさ」、「ありがたさ」、「母親のおかげ」、「すまなさ」、「母親のせい」として、重回帰分析を行った。感謝の肯定的感情(「うれしさ」、「ありがたさ」、「母親のおかげ」)には、愛着回避、愛着不安ともに負の影響を与えていたが、愛着回避の方がより大きく負の影響を与えていた。愛着不安は、感謝の自責的感情(「すまなさ」)に正の影響を与えていた。感謝の要求的感情(「母親のせい」)については、愛着不安、愛着回避ともに正の影響を与えていたが、愛着不安の方がより大きく正の影響を与えていた。この結果は、母親に対する感謝を素直に感じられない青年の背景に、愛着の問題が影響している可能性を示唆する。

キーワード：愛着スタイル、感謝、大学生

## 1. 問題と目的

子どもが生まれて初めてこの世で出会い強い絆を形成する相手は、母親およびその家族であり、家族は子どもの社会化の最初の大切な担い手である。特に母親がどのような養育態度で育てるかが愛着に影響を与える。愛着とは、子どもがづらい状況に置かれたときに、主要な養育者(通常は母親)との近接性を維持したり、回復したりしようとする強い傾性である(加藤, 1998)。人はこの養育者との間に築かれた愛着をベースとして、社会性を発展させていく。児童期まで主たる愛着対象は親であるが、青年期にかけて愛着の対象は友人や恋人が主となる。青年期に子どもが、親との関係をどう捉えなおし、再構築するかは、友人や恋人と長期にわたる安定した関係性を確立・維持し、また生産的な職業を持つなどの諸課題をこなしていくための重要なポイントとなる(安藤・遠藤; 2005)。

一方、池田(2010)は、青年期は親に対してだけでなく全般的に素直に感謝しにくい時期であることに触

れ、青年期における親に対する感謝への抵抗感を検討した。その結果、およそ5割の青年が親に対する感謝を素直に感じるができないこと、その親に対する抵抗感は、自分の大人へのなりきれなさ、親に対する不満、親の自分への愛情に対する疑問によって生じていることが示された。この研究では、大学生において、親に対する不満、自分への愛情に対する疑問が中学生や高校生に比べて比較的高いことも示された。親を安全基地とした愛着の変化の途上にある青年期において、不満を抱き、自分への愛情に疑問を感じる母親との関係を見直すことは、自己洞察や親子関係の理解に繋がり、今後の友人や恋人といった新たな愛着対象との安定した関係性を確立・維持するために有意義であると考えられる。

また、池田(2006)は、青年期における母親に対する感謝の心理状態を明らかにするために、中学生・高校生・大学生を対象に、母親に感謝しているときに感

\* 医療法人和光会 一本松すずかけ病院 心理士

\*\* 福岡県立大学大学院人間社会学研究科心理臨床専攻 教授

じる気持ちと、自分が苦勞しているのは母親のせいだと感じる気持ちを検討している。その結果、母親に感謝しているときに感じる気持ちとして、援助してくれることへのうれしさ、産み育ててくれたことへのありがたさ、負担をかけたことへのすまなさ、今の生活をしていられるのは母親のおかげだと感じる気持ちという4種類の気持ちが抽出された。さらに、青年期における母親に対する感謝には、自分が苦勞しているのは母親のせいだと感じる傾向が見られる“要求的な心理状態”から、負担をかけてすまないと感じる“自責的な心理状態”の出現、負担をかけたことへのすまなさ自分が苦勞しているのは母親のせいだと感じる傾向が小さくなる“充足的な心理状態”になるという変化の順序性が確認された。

感謝と親子関係や母子関係との関連について、平木(1994)は、青年は第二の分離・個体化(Blos,1985)の過程において、青年としての親との結びつきと分離を試みると述べており、その結びつきと分離が、青年の自立性と親との親密さを両立させるようなものであったとき、それは明確に「恩恵を受けていることに感謝する」気持ちとなり、親と子の心の絆として意識されるとしている。また、小澤(2004)は、「親子の縁を、親子であるという宿命を、親子の絆という情緒的結合の物語として親子のかかわりを通して得ていくこと、それが、親と子どもがかかわって生きることの原点であろう」と述べ、さらに池田(2010)は、このような親子であるという宿命を親子の絆として受け止め直すことを通して、村瀬(1996)が論じる「自分の今日あるは父母のおかげである」という感謝の感覚が生じてくるとしている。感謝について、親子関係や母子関係との関連については言及されており、前述したように母親に対する感謝の研究はあるが、愛着と母親に対する感謝との関連は示されていない現状がある。また、有光(2010)は感謝をポジティブな自己意識的感情としたうえで、親密な親子関係は肯定的感情の経験に繋がるとして愛着との関連性の検討の必要性を述べている。

以上から、本研究では、大学生における愛着スタイルと母親に対する感謝との関連を検討することとした。本研究では、愛着スタイルの2側面である愛着不安と愛着回避が、母親に対する感謝にそれぞれ影響を与えていると仮定し、その関連を重回帰分析にて検討した。

## 2. 方法

### 1) 対象

福岡県内の保健福祉系大学に通う男女大学生247名(男性36名、女性210名、性別無記入1名)。

### 2) 調査手続き

調査時期は2017年7月から10月であった。大学での講義後の時間を利用して無記名の質問紙を配布し、回答後、その場で回収した。なお、調査への協力は任意であること、調査に協力しないことで不利益を被ることはないこと、個人情報に厳重に保管・守秘すること等を研究者が事前に説明した上で調査を実施した。

### 3) 調査内容

① 年齢、性別、主な養育者に関する質問

② 親版ECR(丹羽, 2005)

親に対する愛着を愛着不安と愛着回避の2次元からとらえた質問紙で、信頼性と妥当性の確認されている。この質問紙は、愛着不安8項目と愛着回避9項目の計17項目で構成される。各項目への回答は、自分に当てはまると思う程度を「まったくあてはまらない(1点)」、「あまりあてはまらない(2点)」、「どちらともいえない(3点)」、「ややあてはまる(4点)」、「よくあてはまる(5点)」の5件法で求めた。各項目の合計得点をそれぞれ愛着不安得点、愛着回避得点とした。

③ 母親に対する感謝を尋ねる質問

先行研究(池田, 2006)から母親に対して感謝しているときに感じる4種類の気持ちと「自分が苦勞しているのは母親のせいだと感じる気持ち」の5種類を、母親に対する感謝を尋ねる質問の下位尺度として設定した。下位尺度は、感謝の肯定的感情である「援助してくれることへのうれしさ」(以下、「うれしさ」と略)10項目、「産み育ててくれたことへのありがたさ」(以下、「ありがたさ」と略)8項目、「今の生活をしていられるのは母親のおかげだと感じる気持ち」(以下、「母親のおかげ」と略)4項目、感謝の自責的感情である「負担をかけたことへのすまなさ」(以下、「すまなさ」と略)11項目、感謝の要求的感情である「自分が苦勞しているのは母親のせいだと感じる気持ち」(以下、「母親のせい」と略)13項目、合計46項目で構成される。

各項目への回答は、「まったくあてはまらない(1点)」、「あまりあてはまらない(2点)」、「どちらともいえない(3点)」、「ややあてはまる(4点)」、「非常にあてはまる(5点)」の5件法で求めた。

各項目の合計得点をそれぞれ「うれしさ」得点、「あ

## 大学生における愛着スタイルと母親に対する感謝との関連

りがたさ」得点、「すまなさ」得点、「母親のおかげ」得点、「母親のせい」得点とした。

### 4) 分析方法

まず、母親に対する感謝を尋ねる質問の各下位尺度と愛着不安得点及び愛着回避得点の相関関係を確認するために、Pearson の2変量の相関分析を行った。

次に、親への愛着の2次元である愛着不安と愛着回避が、母親に対する感謝にどのように影響しているのかを検討するために、独立変数を愛着不安と愛着回避、従属変数を母親に対する感謝を尋ねる質問の5つの下位尺度として、重回帰分析を行った。

なお、統計パッケージはIBM SPSS Statistics (version20.0) を用いた。

## 3. 結果

### 1) 対象者の背景

回答に不備があった11名を除き、有効者回答数は236名であった。有効回答の内訳は、男性33名、女性203名であり、平均年齢は19.2±0.91歳であった。主な養育者は、両親182名(77.11%)、母親51名(21.61%)、父親2名(0.85%)、祖母1名(0.42%)であった。

### 2) 愛着不安得点、愛着回避得点と母親に対する感謝得点との相関

各尺度間の相関結果を表1に示す。愛着不安得点と愛着回避得点という独立変数間に弱い正の相関(0.327、 $p<.01$ )が認められた。

愛着不安得点は、「うれしさ」得点との間に中程度

の負の相関(-0.406、 $p<.01$ )が、「ありがたさ」得点との間に中程度の負の相関(-0.416、 $p<.01$ )が、「母親のおかげ」得点との間に弱い負の相関(-0.275、 $p<.01$ )が、「母親のせい」得点との間に中程度の正の相関(0.517、 $p<.01$ )がそれぞれ認められた。愛着回避得点は、「うれしさ」得点との間に強い負の相関(-0.719、 $p<.01$ )が、「ありがたさ」得点との間に中程度の負の相関(-0.479、 $p<.01$ )が、「すまなさ」得点との間に弱い負の相関(-0.240、 $p<.01$ )が、「母親のおかげ」得点との間に中程度の負の相関(-0.510、 $p<.01$ )が、「母親のせい」得点との間に中程度の正の相関(0.446、 $p<.01$ )がそれぞれ認められた。

「うれしさ」得点は、「ありがたさ」得点との間に強い正の相関(0.728、 $p<.01$ )が、「すまなさ」得点との間に弱い正の相関(0.352、 $p<.01$ )が、「母親のおかげ」得点との間に強い正の相関(0.716、 $p<.01$ )が、「母親のせい」得点との間に中程度の負の相関(-0.541、 $p<.01$ )がそれぞれ認められた。「ありがたさ」得点は、「負担をかけたことへのすまなさ」との間に中程度の正の相関(0.417)が、「母親のおかげ」得点との間に強い正の相関(0.781、 $p<.01$ )が、「母親のせい」得点との間に中程度の負の相関(-0.609、 $p<.01$ )がそれぞれ認められた。「すまなさ」得点は、「母親のおかげ」得点との間に中程度の正の相関(0.569、 $p<.01$ )が認められた。「母親のおかげ」得点は、「母親のせい」得点との間に中程度の負の相関(-0.544、 $p<.01$ )が認められた。

### 3) 愛着が母親に対する感謝に及ぼす影響の検討

肯定的感情、自責的感情、要求的感情のいずれにつ

表1. 愛着と母親に対する感謝の相関

	愛着不安	愛着回避	うれしさ	ありがたさ	母のおかげ	すまなさ	母のせい
愛着不安	1.00	0.327**	-0.406**	-0.416**	-0.275**	0.094 <sup>+</sup>	0.517**
愛着回避		1.00	-0.719**	-0.479**	-0.510**	-0.240**	0.446**
うれしさ			1.00	0.728**	0.716**	0.352**	-0.541**
ありがたさ				1.00	0.781**	0.417**	-0.609**
母のおかげ					1.00	0.569**	-0.123**
すまなさ						1.00	-0.544**
母のせい							1.00

\*\* $p<.01$ 、<sup>+</sup> $p<.10$

いてもVIFは、愛着不安1.119、愛着回避1.119であったため、多重共線性は起こっていないと判断した。

(1) 愛着が感謝の肯定的感情に及ぼす影響

①「うれしさ」に及ぼす影響

決定係数(R<sup>2</sup>)は0.550、標準化回帰係数は、愛着不安β=-0.191 (p<.01)、愛着回避β=-0.657 (p<.01)となり、愛着不安、愛着回避とも、負の影響を与えていたが、愛着回避の方がより大きく影響していた。

②「ありがたさ」に及ぼす影響

決定係数(R<sup>2</sup>)は0.305、標準化回帰係数は、愛着不安β=-0.290 (p<.01)、愛着回避β=-0.384 (p<.01)となり、愛着不安、愛着回避とも、負の影響を与えていたが、愛着回避の方がより大きく影響していた。

③「母親のおかげ」に及ぼす影響

決定係数(R<sup>2</sup>)は0.273、標準化回帰係数は、愛着不安β=-0.121 (p<.05)、愛着回避β=-0.470 (p<.01)となった。したがって、愛着不安、愛着回避ともに、負の影響を与えていたが、愛着回避の方がより大きく

影響していた。

(2) 愛着が感謝の自責的感情(「すまなさ」)に及ぼす影響

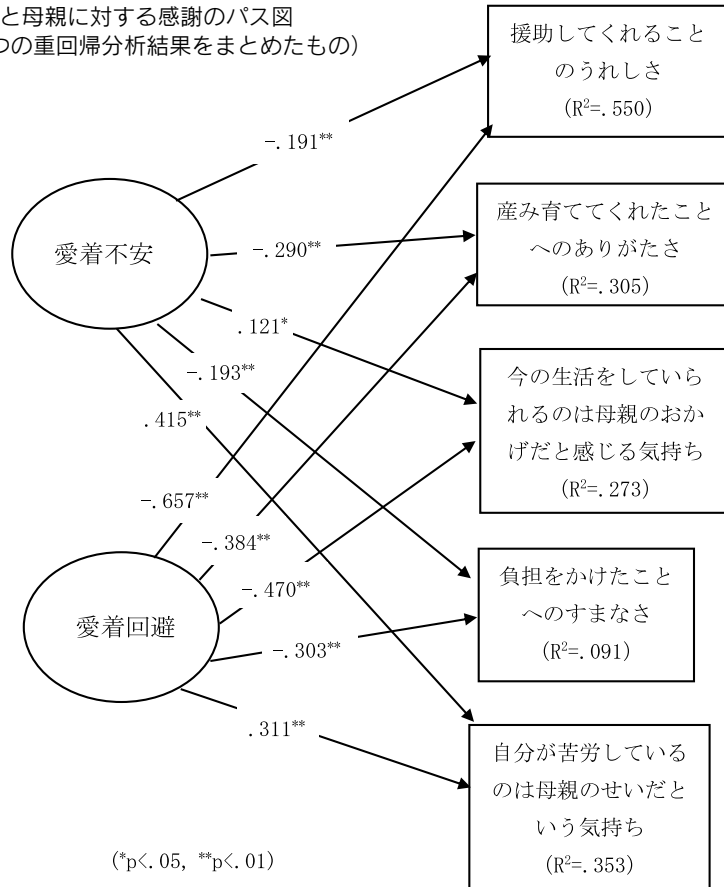
決定係数(R<sup>2</sup>)は0.091、標準化回帰係数は、愛着不安β=0.193 (p<.01)、愛着回避が負の有意な値β=-0.303 (p<.01)となり、愛着不安は正の影響、愛着回避は負の影響を与えていた。

(3) 愛着が感謝の要求的感情(「母親のせい」)に及ぼす影響

決定係数(R<sup>2</sup>)は0.353、標準化回帰係数は、愛着不安β=0.415 (p<.01)、愛着回避β=0.311 (p<.01)となり、愛着不安、愛着回避ともに、正の影響を与えていたが、愛着不安の方がより大きく影響していた。

なお、上記の重回帰分析の結果をまとめたパス図を図1に示した。

図1. 愛着と母親に対する感謝のパス図  
(5つの重回帰分析結果をまとめたもの)



## 4. 考察

### (1) 愛着が感謝の肯定的感情に及ぼす影響

感謝の肯定的感情には、愛着回避が愛着不安よりも大きな負の影響を与えていた。親への愛着の2次元である愛着不安は自己に関するもの、愛着回避は他者に関するものである(丹羽, 2005)。愛着回避の高い者は、他者についての内的作業モデルがネガティブであるため、他者は自分を受け入れてくれず、信頼できる存在ではないという確信を抱き、他者に対して拒否的で、親密な関係を築くことを避けてしまう傾向が強い(今野・小川, 2012)。一方で愛着不安は自己についての内的作業モデルを指すものであるため、感謝の対象が「母親」という他者への感謝感情では、愛着回避の方がより大きな負の影響が現れたと考えられた。

愛着回避よりは小さいものの、愛着不安も同様に負の影響を及ぼしていた。丹羽(2011)は、愛着不安の高さは自尊感情の低さと関連し、愛着不安の高い者は、自信がなく、自分の価値観を低く評価しているため、支援してくれる他者に期待できないと述べている。愛着不安の高い者は、自尊感情の低さゆえに自分が母親から得た利益や恩恵に対して期待が持てず、感謝の気持ちが高まらないことが考えられた。

### (2) 愛着が感謝の自責的感情に及ぼす影響

「負担をかけたことへのすまなさ」には、愛着不安が正の影響を、愛着回避が負の影響を与えていた。愛着回避が負の影響を及ぼすことについては、愛着回避が他者についての内的作業モデルであるため、他者である母親についての拒否的で信頼できない傾向が現れたものだと考えられた。愛着不安が正の影響を及ぼしていることについては、心理的負債が関わっていると考えられた。心理的負債は、相手との関係が今後も続く場合に強くなる(泉井・中澤, 2010)。愛着不安による自尊感情の低さから「自分は今後も助けてもらえるだろうか」と、今後の母親との関係継続の可能性を不安に思うことで心理的負債が高まり、負担をかけたことに対してすまなさがより大きく感じられたのではないかと考えられた。

### (3) 愛着が感謝の要求的感情に及ぼす影響

「自分が苦労しているのは母親のせいだと感じる気持ち」には、愛着不安が愛着回避よりも大きな正の影響を与えていた。愛着不安の高い人は、愛着回避が高い人と同様に攻撃性が高くなることを示した研究がある。金政・浅野・古村(2017)は、愛着不安が高まる

ことで被受容感が低くなり、攻撃性が高まることを示し、愛着不安が高い人は、他者から見捨てられる不安感や焦燥感から他者からの受容を低く見積もり、他者から受容されていないと感じるとした。また、愛着不安の高い人は、怒り感情を抑制したり、コントロールしたりすることに困難を抱えていることも報告されている。愛着を「関係不安(本研究における愛着不安にあたる)」と「親密性の回避(本研究における愛着回避にあたる)」の2次元でとらえた研究(金政, 2005)によれば、関係不安は他者の感情の感受性に、親密性の回避は自分の感情の表出性にそれぞれ負の影響を与えることが示されている。今回、愛着不安が愛着回避よりも要求的感情に影響を及ぼした要因にはこのことが関係していると考えられた。つまり、愛着回避が高いと、「自分が苦労しているのは母親のせいだと感じる気持ち」という母親への攻撃性は高まるが、その感情表出は抑制される。しかし、今回の結果では、愛着不安が高い者では表出抑制はかからないために、結果としては、愛着不安の方が愛着回避よりも「自分が苦労しているのは母親のせいだと感じる気持ち」に影響を与えたと考えられた。

### (4) 総合考察

本研究によって、青年期における愛着不安や愛着回避が母親への感謝と関連があることが示された。この結果は、母親への感謝を表出しにくい人の背景には愛着の問題があることを示唆し、母親に対する感謝は臨床場面で愛着の問題を理解するうえでひとつの指標になり得るであろう。大久保(2009)は、現代の青年期の親子関係は仲の良い親子関係が特徴といえると述べており、特に女性は母親と友達感覚で接する傾向が強い(辻, 2003)。一方で、青年期は親の自分への愛情に対する疑問が生じる時期でもあり(池田, 2010)、青年が身近な存在である親との関わりについて悩みを抱えることも多い。そのような、親との関係に悩む青年の心理的援助では、援助者が母親との関係について取り扱っていくことは非常に意味があり、その際に母親への感謝について取り扱うことで、青年が持っている母親への愛着や関係の変化について理解が得られやすくなり、援助の方法を評価するうえでひとつの指標になり得るだろう。また、母子関係を振り返り、母親への感謝やすまなさ、母親のせいだと思う気持ちについて洞察を深める援助や、母親に対して感謝ができるような援助を行うことが不安定な愛着スタイルを持つ青年の援助として有効である可能性も、今回の結果が

ら考えられた。感謝と親子関係や母子関係との関連について、平木 (1994) は、青年は第二の分離・個体化の過程において、青年としての親との結びつきと分離を試みると述べており、その結びつきと分離が、青年の自立性と親との親密さを両立させるようなものであったとき、それは明確に「恩恵を受けていることに感謝する」気持ちとなり、親と子の心の絆として意識されるとしている。また、小澤 (2004) は、「親子の縁を、親子であるという宿命を、親子の絆という情緒的結合の物語として親子のかかわりを通して得ていくこと、それが親と子どもがかかわって生きることの原点であろう」と述べ、さらに池田 (2010) は、このような親子であるという宿命を親子の絆として受け止め直すことを通して、村瀬 (1996) が論じる「自分の今日あるは父母のおかげである」という感謝の感覚が生じてくるとしている。

本研究の限界としては、3点挙げられる。一つ目に本研究では、男性のデータ数が女性に比して少なかったために、性差による検討ができなかったことである。感謝の肯定的感情について、男性よりも女性の方が感じる程度が大きく、女性は男性に比べて、感謝を感じることや表明することに抵抗や葛藤が少ない (池田, 2006; 2011)。今後は、男性のデータを増やしたうえで性差についても検討を行う必要がある。二つ目に父親に対する感謝と愛着の検討についてである。岡田 (2011) は、子どもに影響を及ぼす親の愛着スタイルについて、母親の愛着スタイルがもっとも影響が大きいとしたうえで、父親の愛着スタイルの影響も子どもの愛着形成に影響を及ぼすと述べている。また、「母親との愛着が欠如していても、それを補うだけの安定した愛着関係を、父親などの養育者との間でしっかりとつことができれば、その悪影響を免れることも可能だ」とも述べており、父親が母親に代わって主要な愛着対象になり得ることを示している。父親に対する感謝と愛着の関連についても検討を行うことで、より多角的に、青年期における対人関係や社会適応の問題や生きづらさなどの背景を理解し、心理的支援の方法を考えることができるだろう。三つ目に文化差による違いの検討についてである。Wangwan (2004) は、感謝の感情には文化差が見られることを報告している。感謝の重要性は、古くから洋の東西を問わず、宗教や哲学などを通じて訴えられてきた (望月, 2011)。心理療法の一種である内観療法は、浄土真宗の「身調べ」をベースにした心理療法であり、対象者に身近な存在である母親や父親、友人などを想起させ、「反省→ぎ

んげ→感謝→報恩」という内的変化を起こさせる (太田, 1999)。タイ仏教においては自分に対して利益を与えた他者の恩を知り、心に留めるという「感謝心」が強調されている (Wangwan, 2004)。このように信仰する宗教や宗教に関連する教えなどにより、母親に対する感謝を感じる程度や質が異なる可能性が考えられるため、今後は、文化差についても検討していく必要があるだろう。

## 引用文献

- 安藤智子・遠藤利彦 (2005) 青年期・成人期のアタッチメント 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメント 生涯にわたる絆 Pp. 127-163. ミネルヴァ書房
- 有光興記 (2010) ポジティブな自己意識的感情の発達. 心理学評論, 53 (1), 124-139.
- Blos, P. (1985) Son and Father: Before and Beyond the Oedipus Complex. New York
- 平木典子 (1994) 親と子の心の絆 岡堂哲雄 (編) 現代のエスプリ別冊 揺らぐ家族と心の健康シリーズ2 親子の心理とウェルネス: 21世紀の幸福な親子関係を目指して Pp. 9-17. 至文堂
- 池田幸恭 (2006) 青年期における母親に対する感謝の心理状態の分析. 教育心理学研究, 54, 487-497.
- 池田幸恭 (2010) 青年期における親に対する感謝への抵抗感を規定する心理的要因の検討. 青年心理学研究, 22, 57-67.
- 池田幸恭 (2011) 大学生における親に対する感謝と個人志向性・社会志向性との関係. 和洋女子大学紀要, 51, 163-178.
- 泉井みずき・中澤潤 (2010) 被援助に対する返報—諸研究の概観と発達研究への展望—. 千葉大学教育学部研究紀要, 58, 73-77.
- 金政祐司・大坊郁夫 (2003) 青年期の愛着スタイルと社会的適応性. 心理学研究, 74 (5), 466-473.
- 金政祐司 (2005) 青年期の愛着スタイルと感情の調節と感受性ならびに対人ストレスコーピングとの関連—幼児期と青年期の愛着スタイル間の概念的—一貫性についての検討—. パーソナリティ研究, 14 (1), 1-16.
- 金政祐司・浅野良輔・古村健太郎 (2017) 愛着不安と自己愛傾向は適応性を阻害するのか?: 周囲の他者やパートナーからの被受容感ならびに被拒絶感を媒介要因として. 社会心理学研究, 33 (1), 1-15.

- 加藤和生 (1998) Bartholomewらの4分類愛着スタイル尺度 (RQ) の日本語版の作成. 認知体験過程研究, 7, 41-50.
- 今野仁博・小川俊樹 (2012) 認知的共感性と成人愛着の関連について—愛着回避に着目して—. 筑波大学心理学研究, 43, 97-107.
- 望月文明 (2011) 感謝と幸福感—近年のポジティブ心理学の研究から—. モラロジー研究, 68, 31-44.
- 村瀬孝雄 (1996) 自己臨床の心理学3 内観 理論と文化関連性 誠信書房
- 中尾達馬・加藤和生 (2003) 成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか?—4カテゴリー (強制選択式, 多項目式) と3カテゴリー (多項目式) との対応性—. 九州大学心理学研究, 4, 57-66.
- 丹羽智美 (2005) 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程. パーソナリティ研究, 13 (2), 156-169.
- 丹羽智美 (2011) 親への愛着による親子のストレス場面に対する評価の差異—図版に対する反応からの検討—. こども未来学研究, 6, 69-80.
- 岡田尊司 (2011) 愛着障害 子ども時代を引きずる人々. 光文社新書
- 大久保摩里子 (2009) 青年期の延長にみる親子関係の変化. 人間文化研究, 12, 27-36.
- 太田耕平 (1999) 内観療法 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 心理学辞典 Pp. 645. 有斐閣
- 小澤理恵子 (2004) 親子関係 伊藤美奈子・宮下一博 (編) 荒れる青少年の心 傷つけ傷つく青少年の心—関係性の病理— 発達心理学的考察 Pp. 95-103. 北大路書房
- 辻 大介 (2003) 若者の友人・親子関係とコミュニケーションに関する調査研究 概要報告書 首都圏在住の16～17歳を対象に. 関西大学社会学部紀要, 34 (3), 373-389.
- Wangwan, J. (2004) 日本とタイの大学生における感謝心の比較研究 (1). 日本道徳性心理学研究, 18, 8-14.